

Top Interview

— 変革に挑む —

まとめ／堀水潤一 撮影／松田康司

本学から生まれる、 社会に役立つ魅力的な研究を 積極的に発信していきたい

科 学は万能ではありません。科学が有効なのは、誰であろうと同じ実験をすれば同じ結果がでる事象に限られています。ところが世の中には、そうならないことが山ほどあります。例えば、何かを美しいと思う感性や、人間関係などもそう。人間社会においては、客観よりも主観が大切な場合が多いです。社会が人間で構成されている以上、技術自体は客観的、中立的なものであっても、それを使う人の心の問題が必ず問われます。本学が「テクノロジーとヒューマニティの融合と調和」という理念を掲げているのもそのためです。倫理観や使命感をあわせもち、社会を支えたいと強く願っています。

その点、ほとんどの教員が学生の名前を覚えらるる規模の大学であることや、文系の学部をもつことの意義は少なくありません。教職員や学生同士の間、ふれあいを通して、人間の集まりであるところの社会に対する適合力を養ってほしいと思います。

大学としては、学生の自発的な活動を支援する取り組み「がんばる！学生プロジェクト」を始めています。絶滅危惧種である県魚の保護を行う「ムサシトミヨ保護プロジェクト」や、公園をライトアップする「OKABE光の回廊プロジェクト」もその二つです。地域に支えられる大学としては、こうした形で地域貢献を進めると同時に、埼玉県北部さらには北関東における「科学技術の

知の拠点」として自らを位置づけたいと考えています。

私自身は、白金やレアメタルを触媒として使わない燃料電池の研究を続けてきました。将来的には燃料電池車の価格を抑える可能性のある研究です。埼玉の森林資源を使ったエネルギー創出や、母親の育児ストレスと子育て支援を研究テーマとする若手もいます。そうした本学発の知や技術を積極的に発信していきたい。大切なのは、いかに社会に直結した、魅力的で価値の高い研究テーマを設定するかということ。これこそパブリックな存在としての大学が果たすべき使命であり、そうした研究を通じて学生を教育していくことが理想です。工学部であれば研究室、人間社会学部であればゼミにおいて、教員や先輩と密度の濃い時間を過ごしながら総合的な人間力を磨いてください。

教育の醍醐味は、入学時にすでに完成された人でなく、ごく普通の学生を育て、社会に送りだすこと。社会で困らないだけの基礎知識を教えることはもちろんですが、本人がもっている能力、興味、やる気をいかに引きだし、その気にさせるかにあります。着任以来30余年、学生とともに過ごしてきた経験を通じて心からそう感じています。



学長 埼玉工業大学
内山俊一

【学長プロフィール】うちやましゅんいち●1951年生まれ。東京大学大学院工学系研究科博士課程修了(工学博士)。埼玉工業大学工学部助教授、同教授、同大学院工学研究科物質科学工学専攻教授、同工学研究科長、埼玉工業大学副学長を経て、2011年4月より現職。

【大学プロフィール】1903年創立の東京商工学校を源流に、1976年開学。工学部(機械工学科、生命環境化学科、情報システム学科)および人間社会学部(情報社会学科、心理学科)の2学部5学科。